書評

松本久史著

『荷田春満の国学と神道史』

中野裕三

近世の国学に関する研究は、所謂国学の二大巨峰と称される本居宣長や平田篤胤の思想分析を始めとして、すでに重厚な研究成果が蓄積されている。しかしそうした先行研究の多くは、国学者の業績を、もっぱら古典の文献学的な分析に立脚するとの認識に基づくものであり、神社や祭祀といった問題を如何に国学者が重視していたのか、あるいは国学者の学問を神社はどのように受容したのか、といった問題については看過される傾向にあったと思われる。換言すれば、思想と制度との「絡み合い」に着眼点を置きながら国学を分析するといった学的方法は、従前の近世の国学研究に欠如していたとも言えよう。

本書は、こうした研究の盲点に対して一石を投じるものであり、従前の神道思想史研究に踏襲された国学者の著述を詳細に分析することに加えて、「近世神道が展開した場である神社と、その主体としての神職が、どう国学を受容したのか」という問題意識に基づいて執筆された。即ち、大国隆正によって「国学四大人」の祖に据えられた京都の稲荷社社家の出身である荷田春満をめぐって、当代の思想家との学的交渉や神社の状況を見据えた神道史という立場から分析した論考を中心に纏められたものである。

本書の構成を、予め紹介しておこう。

はじめに
第一章　荷田春満の学問形成と展開
　第一節　荷田春満と契沖の学的関係―『日本書紀神代巻訓釈伝類語』を中心に―／第二節　荷田春満の学統に関する一考察―奥村仲之との関係を中心にして―／第三節　荷田春満の神代巻解釈の形成過程―稲荷社祭神説と関連して―／第四節　荷田春満の伝授否定とその意味―国学の発生と関連して―／補論　『日本書紀』神代巻講義の聞書および問答書類について
第二章　春満学の継承と展開
　第一節　稲荷社祠官著作の由緒記と荷田春満の神代巻解釈／第二節　賀茂真淵の古道観
第三章　遠州荷田派の学問・行動と神社

第一節　杉浦国頭の学問形成と家職―前期国学研究の課題と関連して―／第二節　近世遠江国における式内社研究―国学者の著述を中心に―／第三節　近世遠江国における神社・神職の組織化の問題

第四章　近代国学への展望とその研究

第一節　「気吹舎蔵板」版行に関する基礎的研究―「伊吹廼屋先生及門人著述刻成之書目」各種の紹介と考察―／第二節　維新期平田派国学と民俗信仰―『宮比神』神像画を例にして―／第三節　近代神道学者の国学観／補論　國學院大學日本文化研究所における国学研究の歩み

おわりに

第一章には、従前の春満研究に於いて最も包括的且つ詳細な業績を示した三宅清の評価、即ち春満をして、古学を唱えた先覚者の一人ではあるがその学問内容は儒学の古学を受容したものであり独創性を見出すことは出来ない、との学説を批判的に検証する論考が収録された。即ち、「荷田春満と契沖の学的関係」は、春満が研究活動を行った近世初期の学問状況、就中語釈（語源）説を俯瞰した上で、語釈説のみならず仮名遣いについても春満が契沖の学説の強い影響を受けていたことを論証したものである。「荷田春満の学統に関する一考察」では、吉田・吉川神道の学を継承する奥村仲之と春満との書紀神代巻の注釈における学説の共通点と相違点とを明確にした。「荷田春満の神代巻解釈の形成過程」は、春満の神典研究が若年期の神社研究に根差していたことを指摘する興味深い論考であろう。即ち、東羽倉御殿預家に生まれた春満は、元禄七年の稲荷社社殿造営にあたり、羽倉家（荷田家）がそのイニシアチブを握るべく若年期に『稲荷社由緒注進状』を物したが、そこに示された稲荷社の祭神観は後の日本書紀神代巻研究の基礎になっていたことを論証するものである。さらに「荷田春満の伝授否定とその意味」は、当初春満の学問は吉田・吉川神道に顕著に見られた家伝秘授の思想の影響下に形成されたものの、晩年の春満はそれら伝授思想を中心とする既成神道説を否定するに至った学的な経過を明らかにしている。

いずれの論考も、春満の業績を、彼の生きた時代、あるいは当代稲荷社をめぐっての社会状況を押さえた上で分析するものである。その手堅い個々の分析は、三宅清の主張に対するアンチテーゼを示すものであり、春満の学問が所謂「儒家神道」とは一線を画するものであることを、明確にするものであろう。

第二章では、春満の学説が稲荷社の祠官にどのように受

容されたのか、あるいは国学の学統において春満の後継者と目される賀茂真淵の神道思想をめぐって、個々の著述を読み込みながら春満学の継承と展開過程を明らかにしている。

「稲荷社祠官著作の由緒記と荷田春満の神代巻解釈」は、春満の門人であった稲荷社祠官大西親盛が春満の神典観や祭神観を継承し、その学説が大西家に伝わる由緒記に色濃く反映されていたことを、『稲荷社事実考証記』等を通じて分析した力作である。また「賀茂真淵の古道観」では、真淵の思想をして老荘思想と同一視する従前の研究を批判的に捉え、真淵の古道論、とりわけ神観念・霊魂観に焦点を絞り、そこに真淵固有の「神代人代を通底する原理」を見出している。

さらに、第三章は、春満の学問の地域的な展開を見るべく、遠州国学の初期の状況を分析する論考によって構成された。

「杉浦国頭の学問形成と家職」は、遠州国学の祖と評される浜松諏訪神社の大祝である杉浦国頭による春満の学問受容過程を、諸社禰宜神主法度が出され神仏分離の気運が高まる中で、仏教的施設の除去を目的とする諏訪社の造営事業との関連において分析するものである。即ち、春満の学問受容の要因を、「神仏分離の活動を活発化させはじめた神職の自立的傾向」に根差すものであったと主張している。「近世遠江国における式内社研究」では、近世中期以降、学者や神職による式内社考証が活発化する趨勢において、春満の門人であった杉浦国頭や斎藤信幸が関与したと推測される『遠江国式内社摘考』とその類書群が後の遠江国式内社考証の基礎になったこと、そうした研究成果が伴信友にもたらされ、有名な『神名帳考証』の成立を部分的に支えていた、という興味深い事実を明らかにしている。また「近世遠江国における神社・神職の組織化の問題」は、遠江国における吉田家の神職支配の進捗を念頭に置きながら、十八世紀前期に確認される「杉浦国頭を中核とする有力者神職官の交流」を契機として、吉田家による神職の組織化が形成されていく過程を追求するものである。

以上、荷田春満及び荷田派国学に関する論考に焦点を絞って、その内容を紹介してきた。いずれの論考にも一貫する著者の学的方法は、春満の学問と神社あるいはその神社を支える社家といった現実の存在との関連に着目し、厳密な文献考証に基づく客観的な立場から分析しようとするものである。その堅実且つ斬新な切り口は、まさしく荷田春満研究の新たな地平を開くものであろう。

ちなみに、本書は、以上の如くもっぱら稲荷社社家の出身である春満の具体的な足跡や先達の学説との影響関係、

また社家等の門人層に対する春満の学説の普及過程といった着眼点から春満の学問を論じるものであるが、彼の学説を支える神祇信仰、おしなべて神学という領域について、あまり言及されてはいない。もっとも、客観的な神道史という立脚点に基づく著者の学的方法に、そういった領域の分析を期待することは、見当違いなのかもしれない。しかし信仰と文献考証学との相関に国学者の学説が確立されたと見るならば、著者には、春満の信仰的側面にも、目を配って戴きたいと思う。

繰り返すが、本書の主要なテーマの一つは、国学者の学問がどのような経緯を通じて社家等の門人層あるいは特定地域に受容されたのか、という問題である。その着眼点は、第四章に収録された「『気吹舎蔵板』版行に関する基礎的研究」や「維新期平田派国学と民俗信仰」にも通底している。とりわけ後者の論考は、「宮比神御神像」という摺物に着目し、幕末維新期に廃仏政策を断行した薩摩藩、とりわけ民衆の営む民俗信仰に、平田篤胤の摺物がどのように受容されていったのか、といった問題を分析するユニークな論考である。

従って本書を通じて、近世の国学は、単なる空虚な思想活動として終始したのではなく、地に足のついた血の通った学問であったということを、改めて実感できるのではなかろうか。研究者・神職のみならず広く一般読者にも薦めて擱筆とする。

付記　本稿は、「神社新報」平成十八年三月二十七日版に掲載した「『荷田春満の国学と神道史』書評」に、補筆したものである。

（弘文堂、平成十七年十月、A5判、四四〇頁、本体六〇〇〇円）

（國學院大學講師）